

## 2 個別項目

### (1) 耐久性に関する項目

#### 基礎の構造

「べた基礎」(60.4%)が大幅に増加し、反面、「布基礎」(36.5%)は減少して、シェアは逆転した(図9)。

地域別にみると、多雪地域で「布基礎」が多く、その他の地域では「べた基礎」が「布基礎」を上回っている(図10)。

図9 基礎の構造

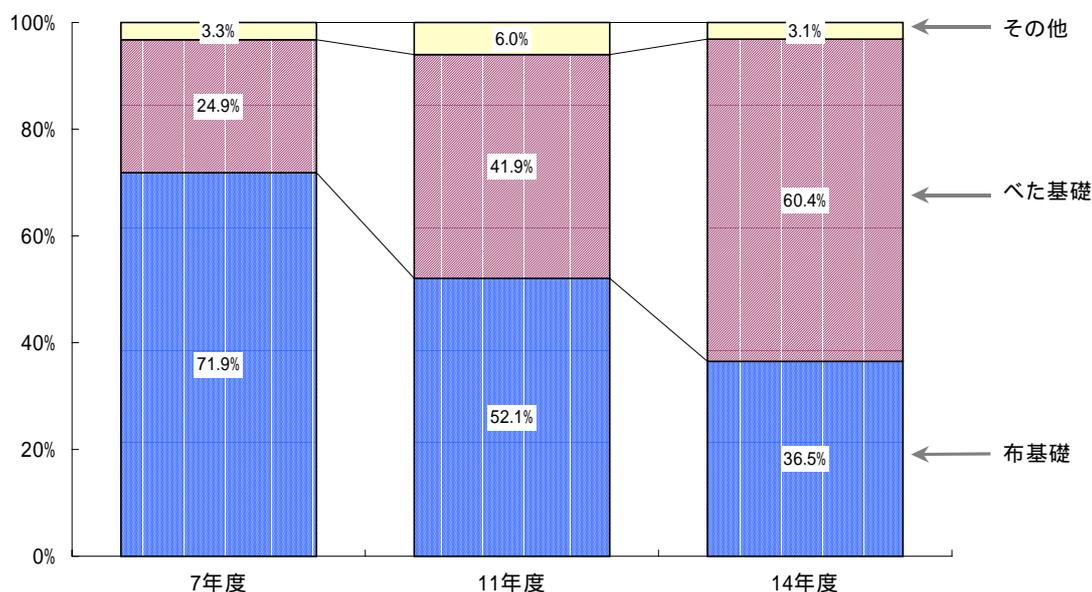
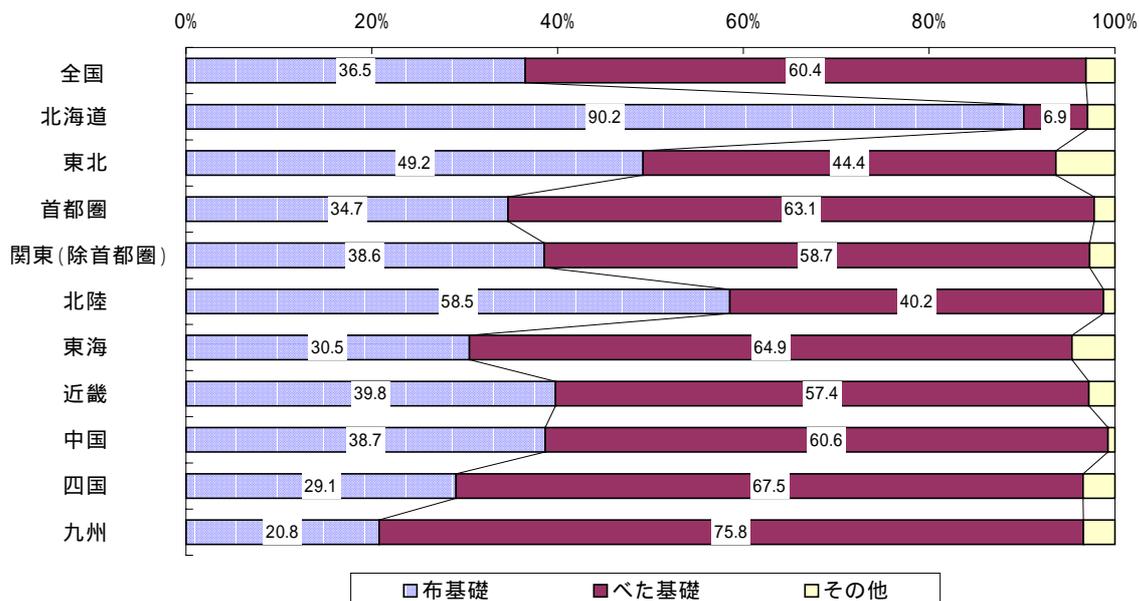


図10 基礎の構造(地域別)



### 基礎の高さ

地盤面から基礎の上端までの高さは「400mm 以上」の割合が 96.7%に達し、平均は 444mm であった(図 11)。

地域別では、多雪地域で基礎が高くなる傾向があり、北海道や北陸では平均で 500mm を超えている(図 12)。

図11 基礎の高さ

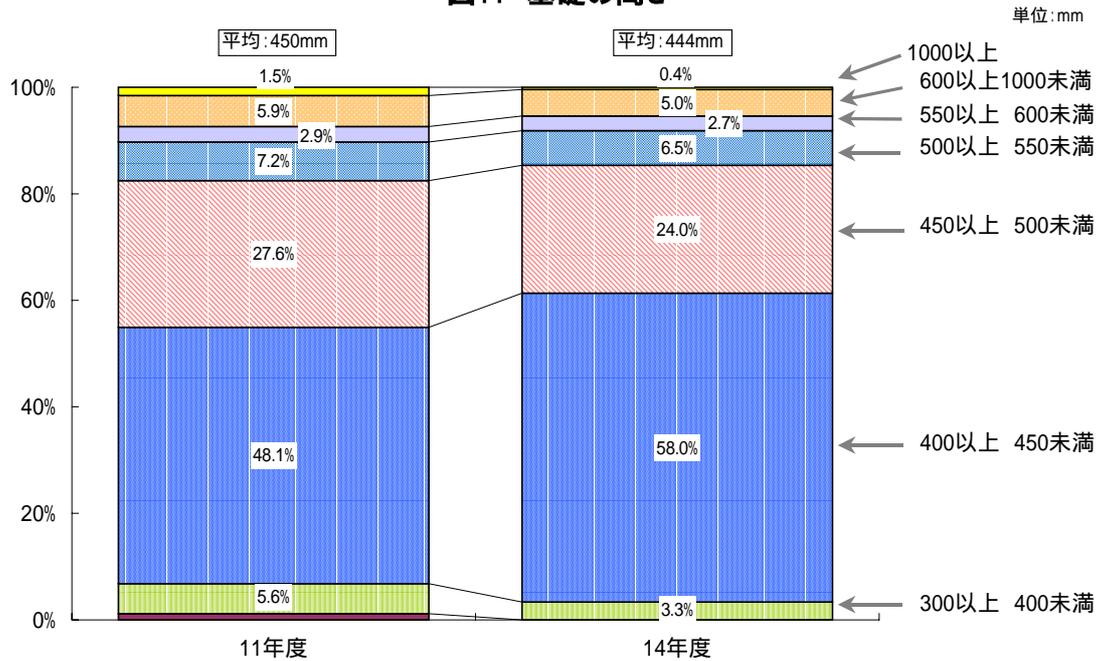
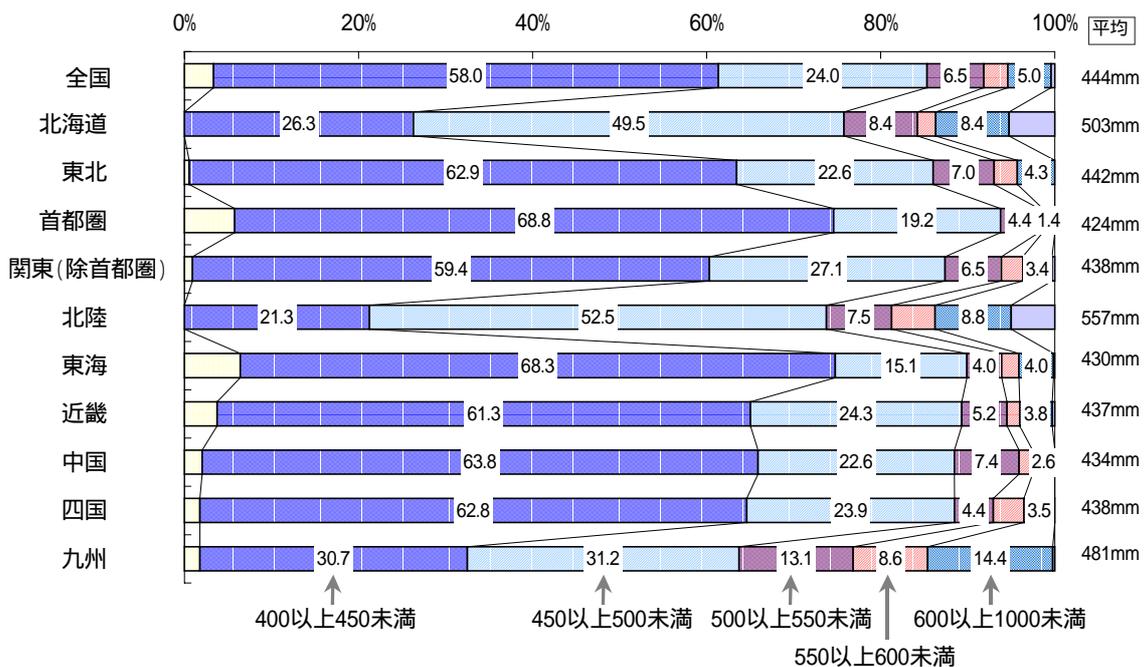


図12 基礎の高さ(地域別)



### 床下防湿措置

「RC造のべた基礎」(37.6%)が増加傾向にある反面、「防湿フィルム敷き」(21.8%)が減少傾向にある(図13)。

工法別にみると、在来木造や枠組壁工法で「RC造のべた基礎」の割合が高く、プレハブ工法で「防湿フィルム敷き」の割合が多くなっている(図14)。

図13 防湿措置の内容

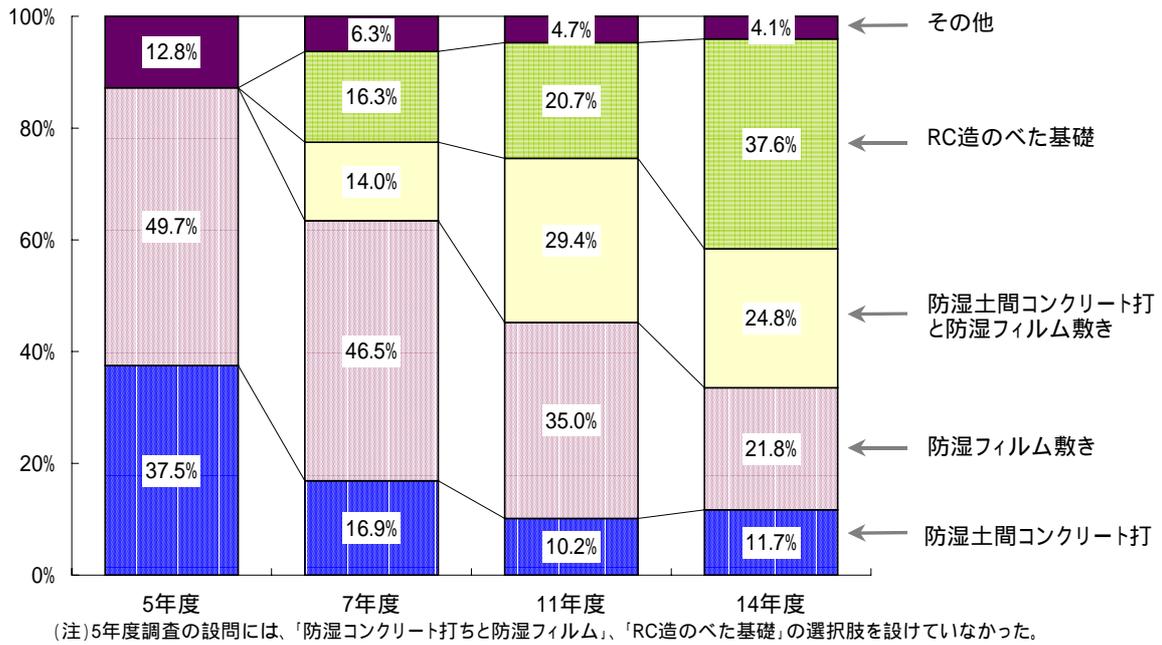
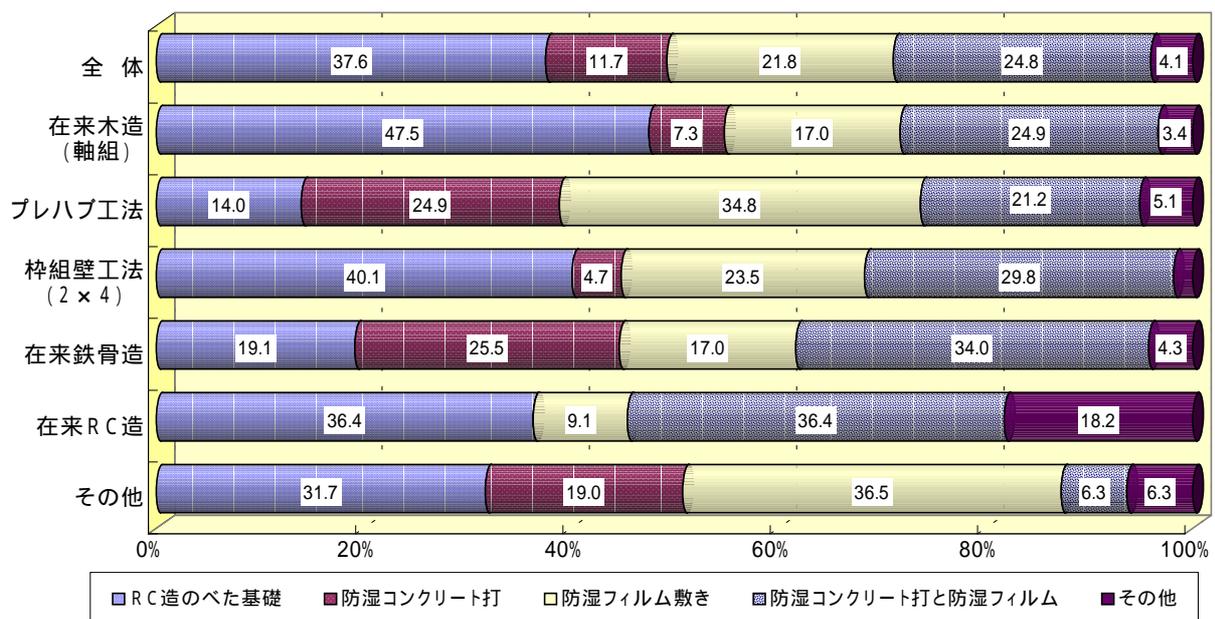


図14 床下防湿措置の内容(工法別)

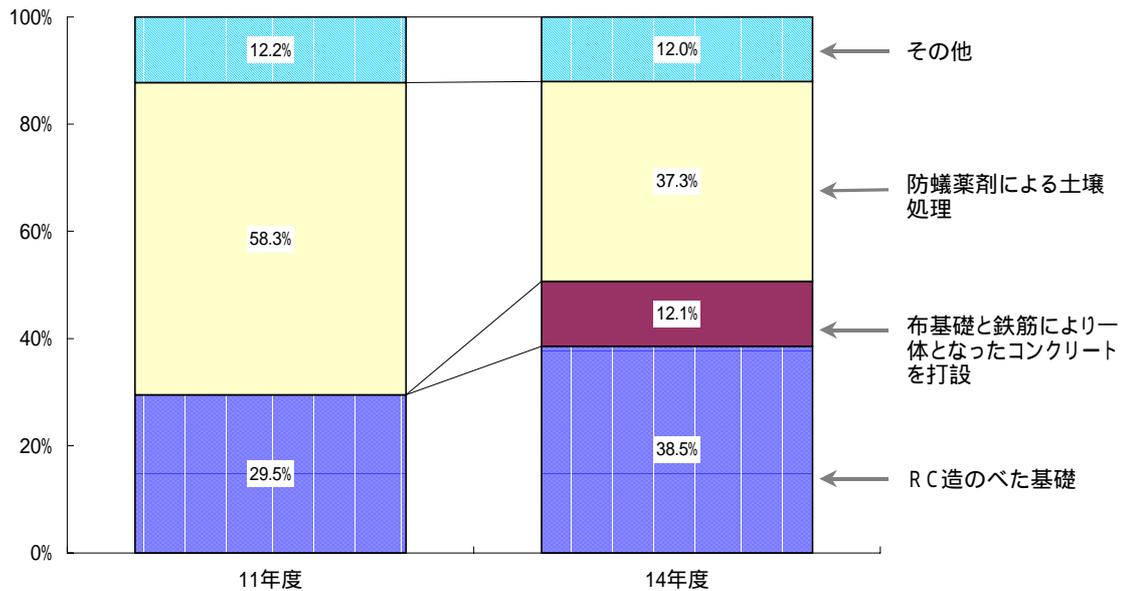


### 床下防蟻措置

床下防蟻措置を「講じている」(96.3%)中で、「RC 造のべた基礎」(38.5%)が増加し、「防蟻薬剤による土壌処理」(37.3%)を上回った。(図 15)。

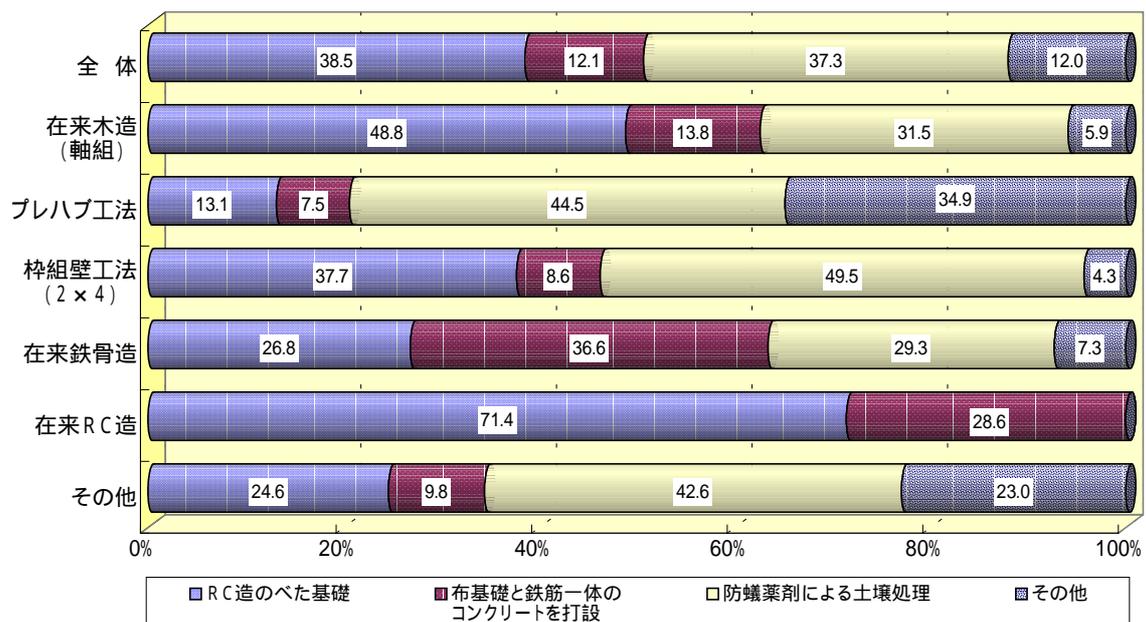
工法別にみると、在来木造や在来 RC 造で「RC 造のべた基礎」が多く、プレハブ工法や枠組壁工法では「防蟻薬剤による土壌処理」が多くなっている(図 16)。

図15 床下防蟻措置の内容



(注)11年度調査の設定には、「布基礎と鉄筋により一体となったコンクリートを打設」の選択肢を設けていなかった。

図16 床下防蟻措置の内容(工法別)



### 床下換気措置

床下換気措置で多い順は、「ネコ土台によって床下換気孔を確保」(49.5%)、「有効換気面積 300 cm<sup>2</sup>以上の床下換気孔を間隔 4m以内ごとに設置する」(37.2%)であった。(図 17)。

工法別にみると、は枠組壁工法(64.5%)、在来木造(56.8%)で多く、他の工法ではが多い(図 18)。

図17 床下換気措置の内容

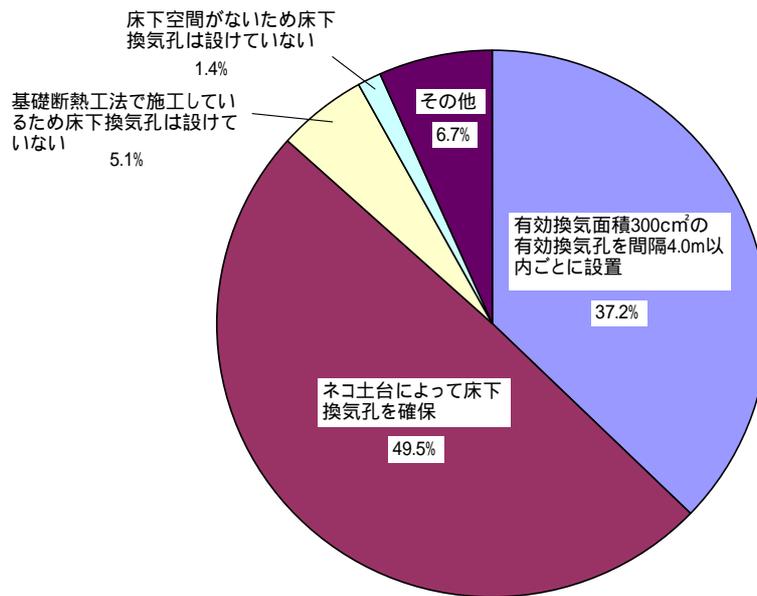
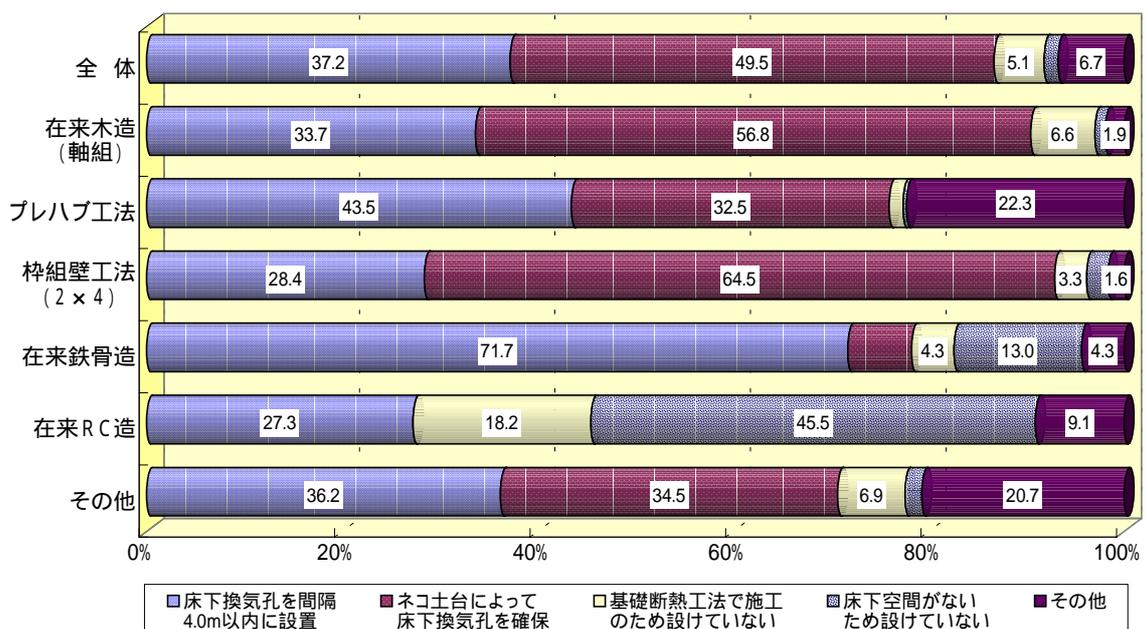


図18 床下換気措置の内容(工法別)



通し柱の寸法と樹種(在来木造)

通し柱の寸法は、「12cm角」が90.6%を占めている(図19)。

樹種は、「ヒノキ」(34.3%)と集成材(38.7%)で全体の約7割を占める。地域別の特徴として、北海道で「エゾマツ・トドマツ」が18%あり、東海・近畿・中国の各地域で「ヒノキ」が40%を超え、九州では「スギ」が50.9%になっている。(図20)。

図19 通し柱の寸法

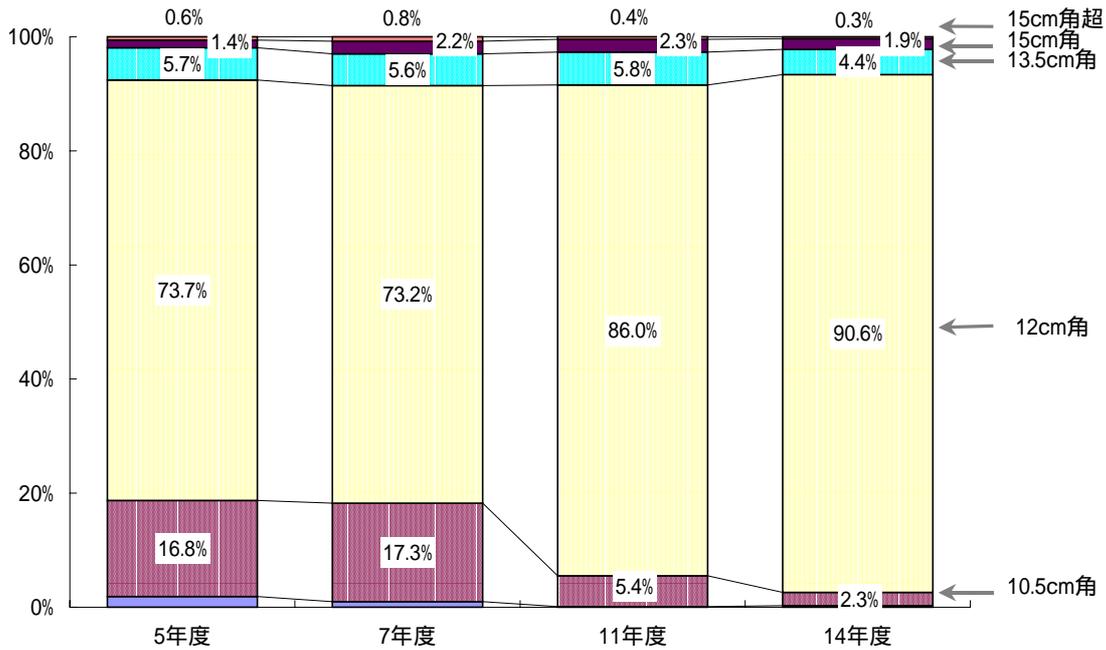
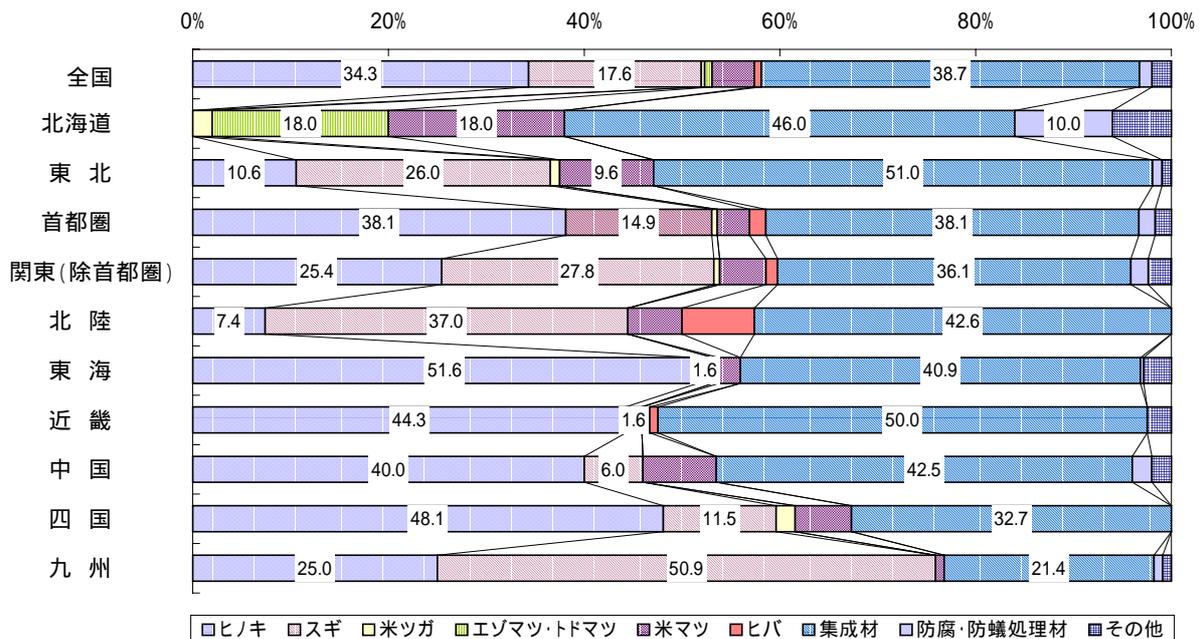


図20 通し柱の樹種(地域別)



管柱の寸法と樹種(在来木造)

管柱の寸法は、「10.5cm 角」(63.8%)が減少し、「12cm 角」(34.8%)が増加する傾向がみられる(図 21)。

管柱の樹種を地域別にみると、四国と九州を除く他の地域では「集成材」が 50%前後であるのに対して、九州では「スギ」が 64.6%に達している。(図 22)。

図21 管柱の寸法

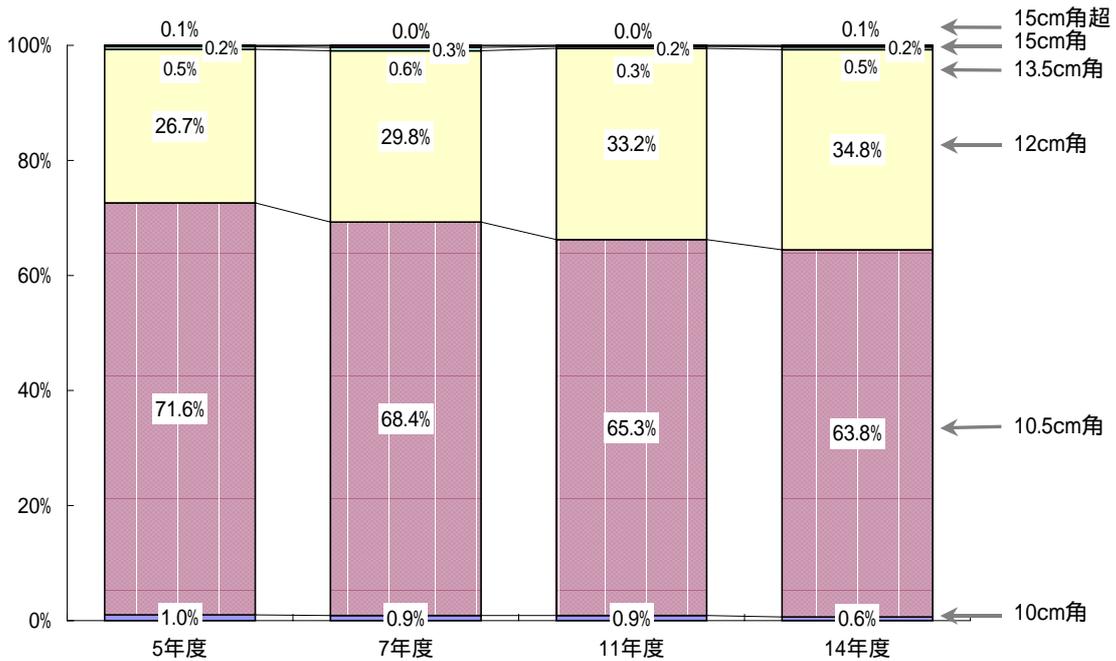
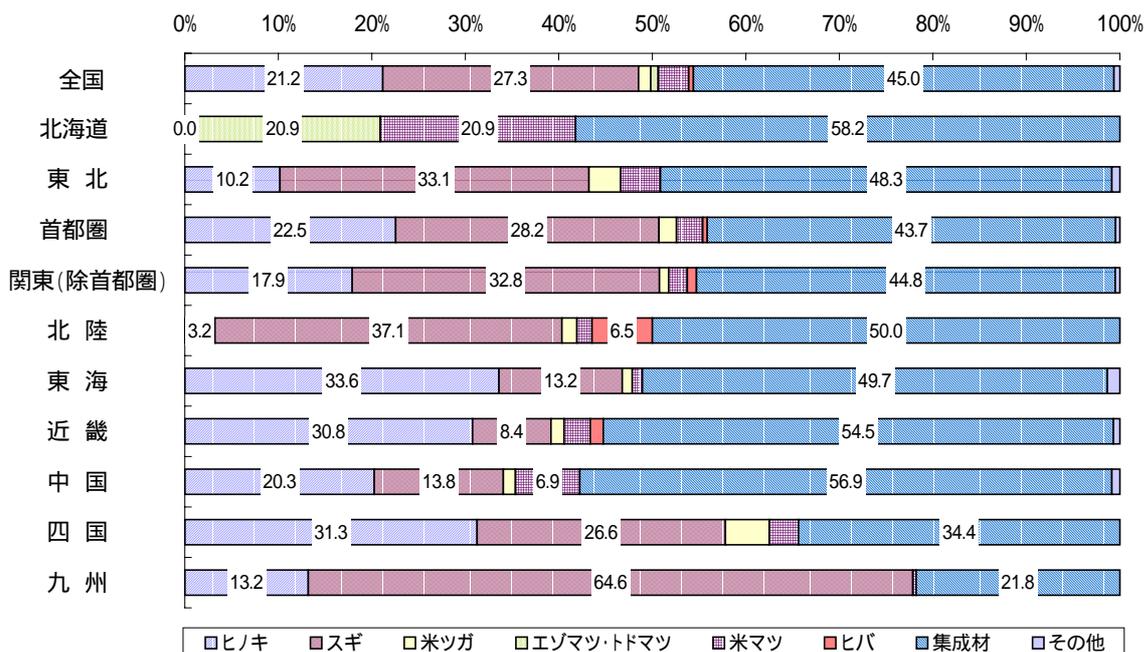


図22 管柱の樹種(地域別)



すみ柱の寸法と樹種(在来木造)

すみ柱の寸法は、「12cm角」が92.6%を占めている(図23)。

すみ柱の樹種を地域別にみると、「集成材」が北海道で67.7%、四国と九州を除く他の地域でも50%前後を占めている。一方、「スギ」が九州で60.5%を占めている(図24)。

図23 すみ柱の寸法

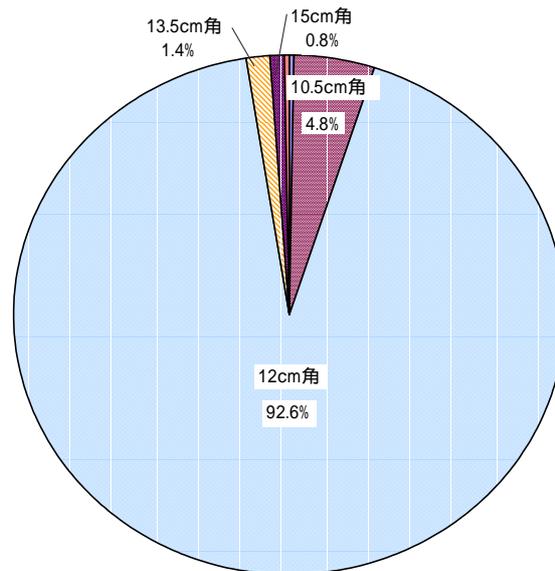
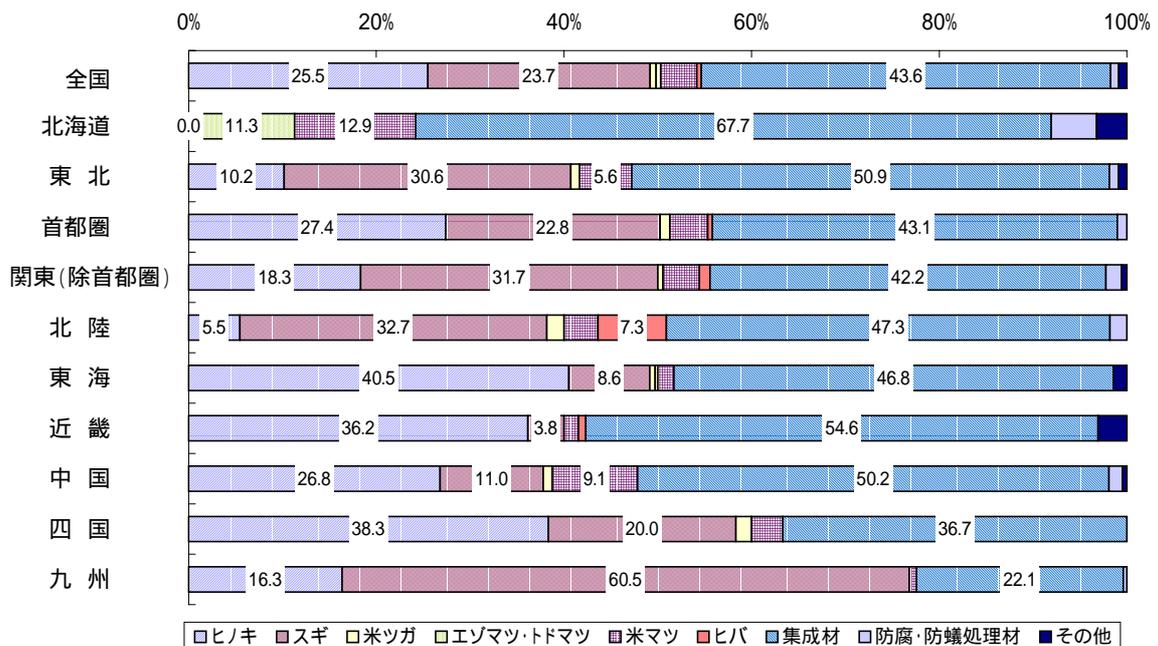


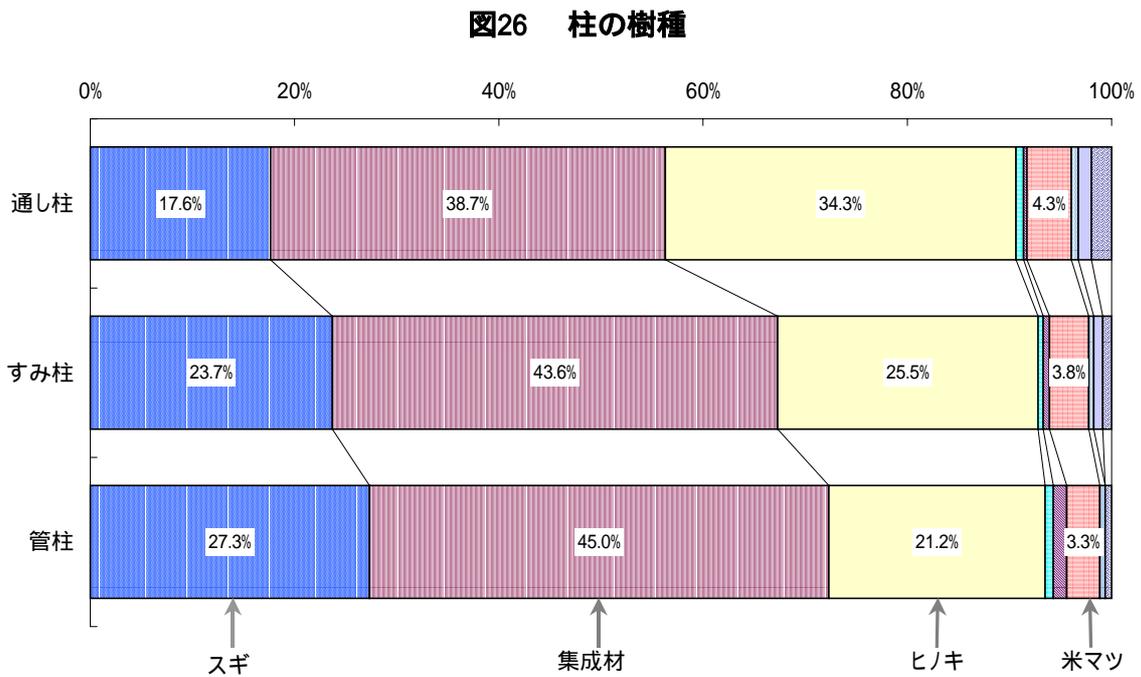
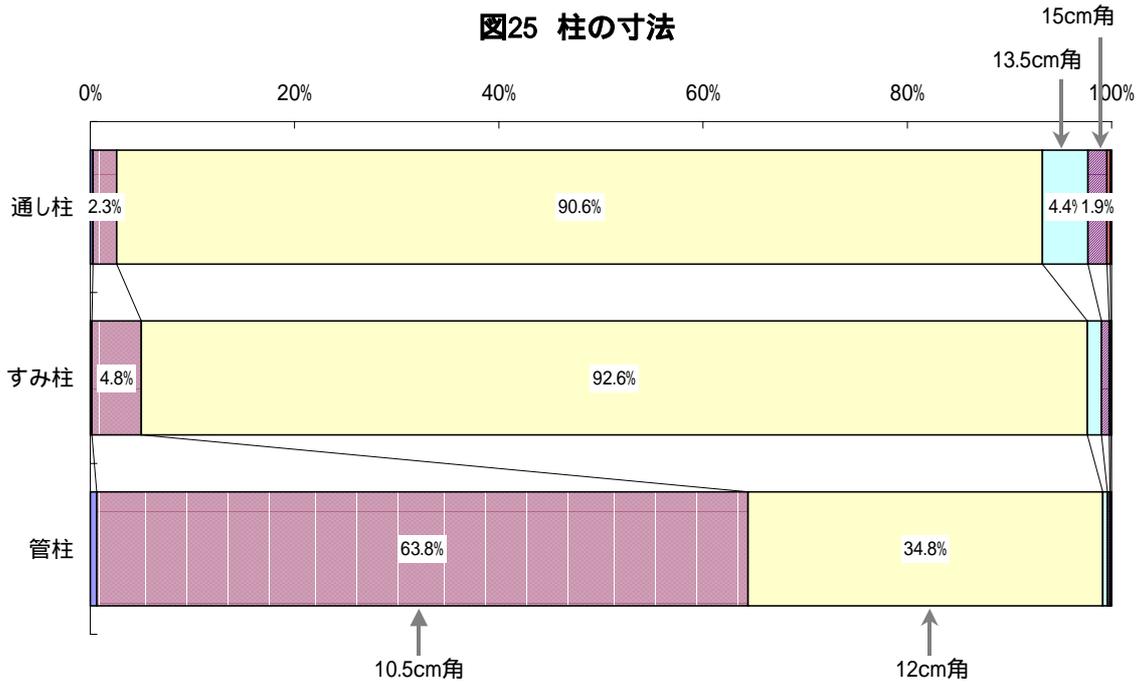
図24 すみ柱の樹種(地域別)



柱の寸法と樹種(在来木造)

柱の寸法は、通し柱とすみ柱で「12cm 角」が 90%を超え、管柱では「10.5cm 角」が 63.8%と最多の使用であった(図 25)。

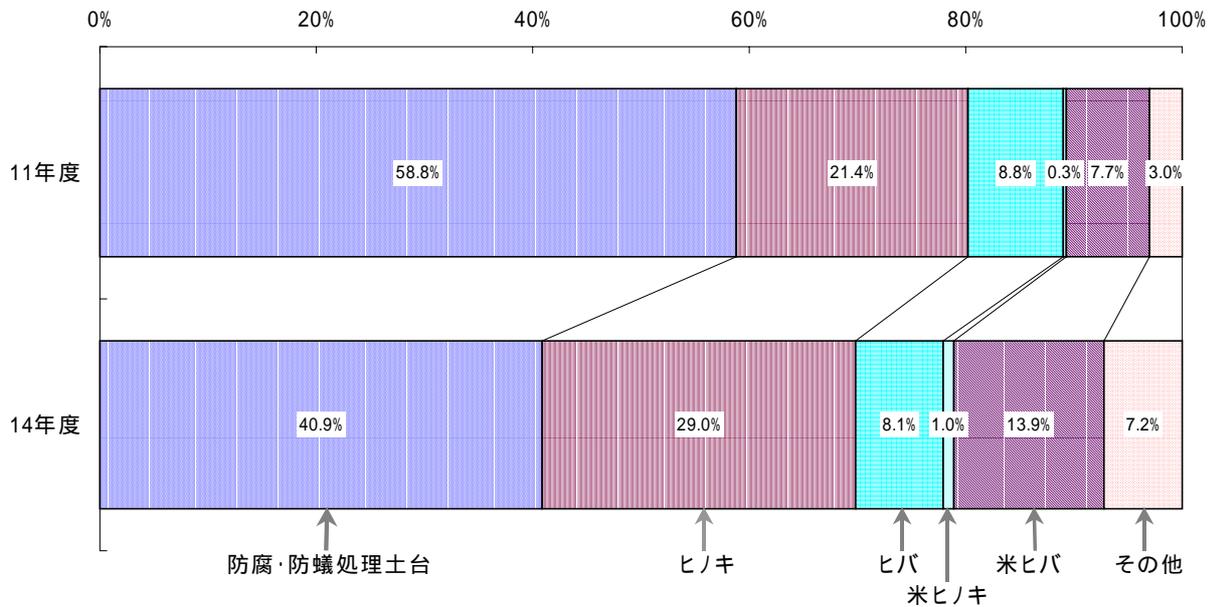
樹種別では、いずれの柱も「集成材」が 40%前後を占めているが、通し柱では「ヒノキ」(34.3%)、管柱では「スギ」(27.3%)の割合が多くなっている(図 26)。



土台の樹種(在来木造)

11年度調査時点と比較すると、「防腐・防蟻処理土台」(40.9%)が減少し、「ヒノキ」(29%)及び「米ヒバ」(13.9%)が増加した(図27)。

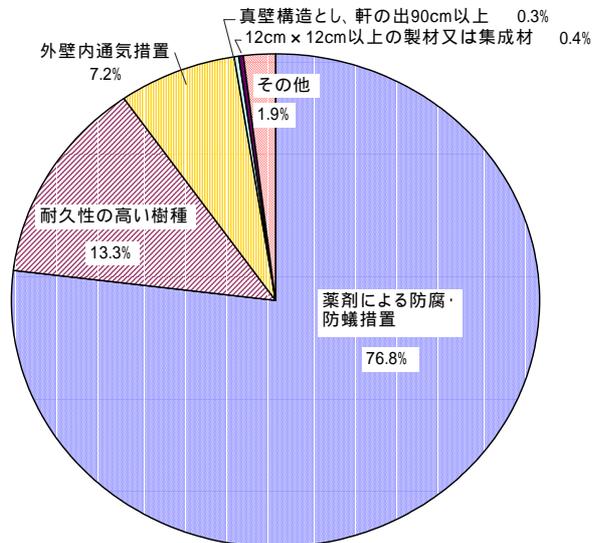
図27 土台の樹種



外壁の軸組等のうち地面から高さ1m以内の部分の防腐・防蟻措置(在来木造)

「薬剤による防腐・防蟻措置」が76.8%を占めている。「ヒノキ、スギ、米マツ、ヒバ等の耐久性の高い樹種による製材またはこれらの樹種を使用した集成材を使用」は13.3%であった(図28)。

図28 外壁の軸組等のうち高さ1m以内の部分の防腐・防蟻措置



### 外壁の構造

「大壁構造(外壁内通気措置)」(58.8%)が最多のシェアを占め、時系列でも増加傾向にある。反面、「大壁構造(通常)」(34.3%)は減少傾向にある。「真壁構造」は1.4%に過ぎない(図29)。

地域別にみると、「大壁構造(外壁内通気措置)」の割合が北海道(91.0%)と北陸(74.7%)で他の地域より多くなっている。「真壁構造」は関東(除首都圏)と近畿で2%台のシェアとなっている(図30)。

図29 外壁の構造

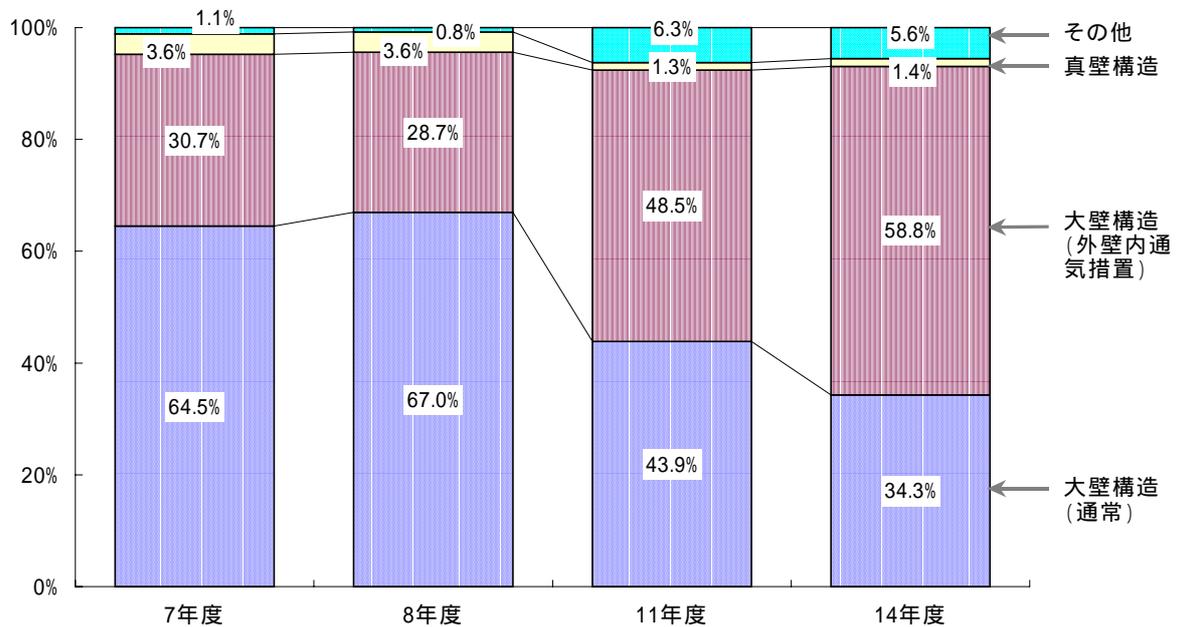
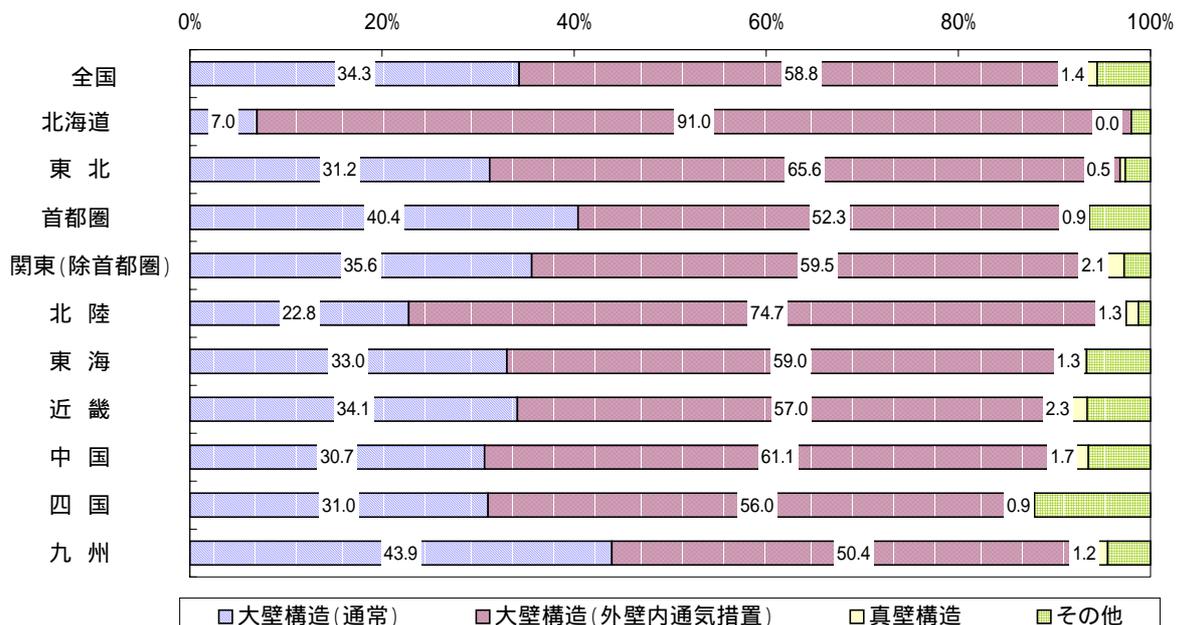


図30 外壁の構造(地域別)



### 小屋裏換気孔

公庫の耐久性基準に定める有効換気面積以上の小屋裏換気孔を「設置している」は87.1%、「屋根面に断熱材を施工しているため設置していない」は10.9%であった。工法別にみると、「設置している」はプレハブ工法(91.4%)、在来木造(89%)で多く、「屋根面に断熱材を施工しているため設置していない」は在来RC造(55.6%)で多くなっている(図31)。

屋根の形状別では、「屋根面に断熱材を施工しているため設置していない」が「陸屋根」(32.4%)、「片流れ」(24.2%)でやや多くみられた他は、「設置している」が90%前後に達している(図32)。

図31 小屋裏換気孔の有無(工法別)

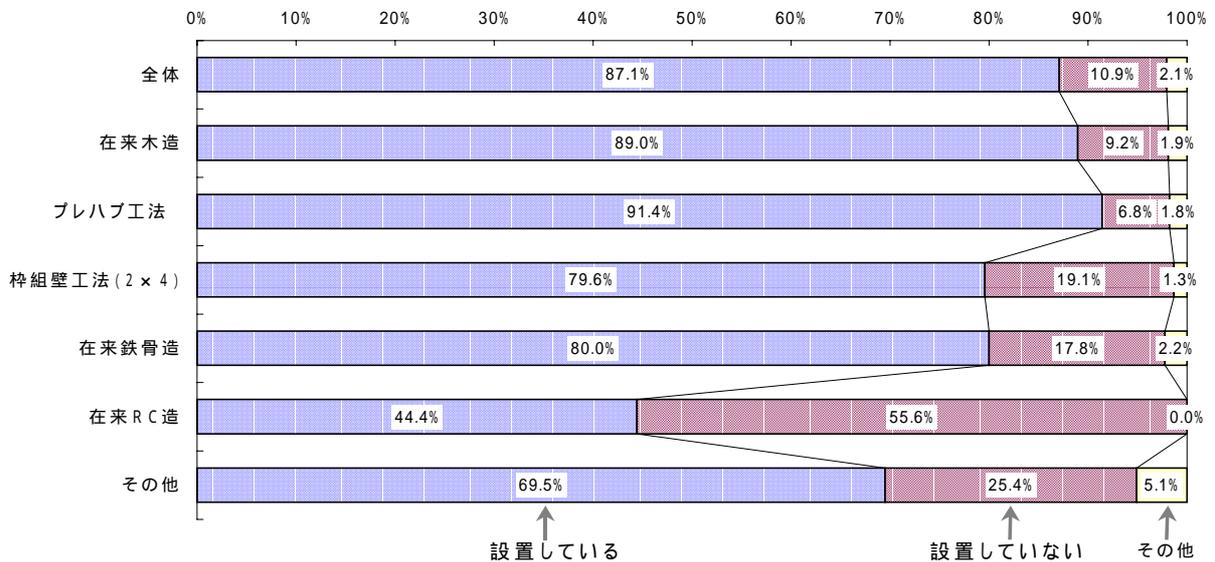


図32 小屋裏換気孔の有無(屋根の形状別)

